



日本記者クラブ

# ヴィーラント・ワーグナー シュピーゲル誌東京支局長を囲む会

2018年11月19日

日本滞在四半世紀、という超親日派ドイツ人ジャーナリストのサヨナラ会見だった。日本とドイツの「類似性」よりむしろ「違い」が指摘された。一つは、産業政策だった。1970年代大量生産による製造業中心の輸出競争力で世界有数の経済大国になっていた両国は壁にぶつかっていた。日本はそこで産業構造の大転換に乗り遅れたが、ドイツは歴代政権の改革努力で日本よりは構造転換に成功した。同じ敗戦国として、日本は侵略の歴史を忘れがちだが、ドイツはそれを忘れることができない。

日本に対する同情心も披露してくれた。米国1国に占領された日本の対米依存が過剰になったのに比べ、4カ国占領だったドイツは米国を相対化する視点を持てた。アジアで孤立する日本に比べ、ドイツはEUとNATOで後ろ盾がある、云々。それはともかく、二つの問題提起があった。日本人は戦後の米国からのプレゼントである民主主義を生かし切っていないのではないか。もう一つは、日本の教育に対してだった。画一的から個人主義的に、暗記より意見表明を、政治への無関心からもっと主権者教育を、ということだった。愛する日本への心を込めての惜別の辞であった。

司会：倉重篤郎 日本記者クラブ企画委員（毎日新聞編集編成局専門編集委員）

[YouTube 日本記者クラブチャンネル動画](#)

©公益社団法人 日本記者クラブ

**司会＝倉重篤郎 日本記者クラブ企画委員  
(毎日新聞編集編成局専門編集委員)** きょうは、ドイツの「デア・シュピーゲル」誌のワーグナー東京支局長に来ていただき、お話を伺います。

ワーグナーさんは日本で特派員を長くお務めでしたが、ことしを潮に、ドイツに帰国されます。これまで日本で取材したことや、中国とインドでも特派員経験がおありなのでアジアの中での日本という観点からも、日本を去るにあたって言いたいことを全てここで言っただくという趣旨で、この会を設けました。

ワーグナーさんの略歴をご説明します。1959年生まれ、59歳です。ドイツ北部キール近くでお生まれになり、フライブルク大学で博士課程を修了されています。

明治の外交史——当時から日本に関心がありまして——が専攻科目で、博士論文は「日清戦争までの日本の対アジア政策」がテーマでした。

その後、日本への関心が高くなり、まず1990年、多分バブルで日本の経済が世界で非常に注目を浴びたころだと思いますが、ドイツ経済通信社が東京支局を開設し、初代の支局長にられました。その後一時大学に戻って勉強されたのですが、またシュピーゲルの東京特派員の話が来て、大学に残るか特派員になるか迷ったそうですが、結局特派員の道を選ばれました。シュピーゲルの東京特派員として1995年から2004年まで約10年間、韓国や東南アジアもカバー。2004年から2010年までは勃興する中国・上海特派員、2010年から2012年までは北京特派員、2012年から2014年まではニューデリー特派員、そして2014年からまた東京にお戻りになり今に至っているということです。

長らく当記者クラブの企画委員も務めていただいた親日派ジャーナリストです。日本語も堪能ですので、きょうは日本語でお聞きしたいと思います。

まずワーグナーさんから短くスピーチをしていただきます。その後対談形式で話を聞き、皆さんからの質問を受けて、全体で1時間ぐら

いで終わらせたいと思います。

よろしくお願いいたします。

**ヴィーラント・ワーグナー シュピーゲル誌東京支局長** ありがとうございます。ただいまご紹介にあずかりましたワーグナーと申します。きょう、この場を設けていただきまして、本当に光栄です。

私は、90年代初めから特派員としてアジアを取材してきましたけれども、いろんな分野の方にお会いすることができました。そのとき、自分が常に質問する立場でしたし、その後一人で机に向かって記事を書きました。その意味で、きょうはこういう形の囲む会で、いろいろ質問されることにはあまりなれていないので、どこまでお役に立てるか、満足できるようなお話ができるのか、ちょっと不安です。しかし、非常におもしろい時期に日本とアジアを取材することができたことは確かです。

先日、シュピーゲル本社のお別れ会もあって、言われたのは、いまの時代に、こんなに長く、一人の特派員として一つの地域を担当できるのはもうあまりないということで、その意味でも非常に幸運だったと思います。

日本のバブル時代から、中国の大国としての台頭を経て、いまのトランプ政権のもとでの混乱まで、大きな流れをみることができました。

しかし、自分が日本あるいはアジアにいればいるほど、いろいろわからなくなってしまう気がします。いまの日本とアジアは、歴史的な過渡期にあるのではないかと思います。

日本は、台頭する中国と、同盟国のアメリカの間で、板挟みになって、新しい役割を探らなければならない状況にあると思います。

しかし、地政学的な面だけではなくて、経済的な面でも、社会的な側面からも、いろいろ過渡期にあるので、将来どうなるのかは誰も予言できないので、特にジャーナリストの場合は予言者ではないので、私もそれはできないと思います。

いまの日本の総理は、戦後レジームから脱却とうたっていますけれども、彼は、その変わり得る新しい体制、あるいはどういう国をつくり

たいのか、実は彼自身にもわからないのではないかという印象があります。

歴史というのは、表面的に変わったとしても、あまり変わらない基礎的な要因もあります。私の日本とのかかわりが始まったのは80年代です。バブル時代でした。大学で日本史を専攻して、明治初期のアジア外交についての博士論文を書きました。テーマは「日本の膨張主義の思想的な基礎」でした。

特に関心があったのは、琉球処分、台湾出兵と征韓論、それについての政治的な議論とその意思決定のプロセスでした。

それでわかったのは、当時の明治日本にとって近隣諸国はただのバッファゾーンにしすぎなかったし、日本の近代化によって生じた社会的な矛盾と緊張を外にそらすための緩衝地帯だったんじゃないかということです。もちろん歴史は同じように繰り返すわけではないんですが、最近の沖縄問題、そして日韓関係と日中問題をみますと、いまでも構造的に似たような状況が続いているのではないかと思います。

しかし、以前に比べれば大きな違いもあります。昔の日本は前向きに将来に向かっていたのに対して、いまの日本は高齢化社会ですし、あらゆる面で後退していると思います。

その意味で、私は日本を少し悲しい気持ちで離れていきます。

以上、私の簡単な挨拶です。

**司会** ありがとうございます。

では、私のほうから少しずつお聞きします。

今回、特派員生活を終わられるにあたって書かれた著書のタイトルが、日本語に訳すと『日本—威厳ある下降』。ドイツ語で何というのかわかりませんが、9月に出版されたわけですね。

**ワーグナー** そうです。

**司会** この本は、どのような中身で、どのような趣旨で書かれたのですか。

**ワーグナー** 基本的に、私はいま、高齢化している日本を、ある意味でドイツにとっての反面教師としてみて、ドイツの読者に向かって警

鐘を鳴らしたかったので、つまり、ちゃんと改革しないと、こういうふうになるぞという形で……。

**司会** どういうふうになっちゃうんですか。

**ワーグナー** 実は、皆さん、私よりいろいろご存じだと思うんですけども、基本的には、ドイツと日本は構造的にいろいろ似ているんですね。

ただ、日本は、高齢化の側面で先輩になると思います。私も今回10年ぶりに日本に帰ってきたときに、ちょっとショックを受けたのは、例えば地方に行くと、いかに疲弊しているかということです。あとは介護状況とか、貧困の格差とか、自分が思ったより、すごく早く進んだということです。自分の頭の中では、まだ最初に日本に来た80年代のバブル時代、つまりその当時は、ドイツからいろんな政治家と企業家が日本にいて、日本を模範にしようとしたわけですし、今回は、こんなに早くいろいろ疲弊して、実はあまり対策がとられていないんじゃないか。つまり、実際は地方を切り捨てているんじゃないかということを心配しているの。

**司会** それで、decline（下降）でもdignity（威厳）があるというのはどういうことなんでしょうか。皮肉ですか。

**ワーグナー** 申しわけないですけど、確かにドイツ人がそれを聞くと皮肉に聞こえるので、つまり、日本人は礼儀正しいイメージがあるんですね。ですから、最後まで表をきちんと保ちながら、実は中はもう結構ボロボロという感じで……。

**司会** ワーグナーさんは日本の政治ウォッチャーとしても結構長くみてきたんですね、この30年来。で、いろんな流れがありましたけれども、いま安倍政権が一応9年、10年やるかもしれないという本格政権ですよ、この安倍政権のウォッチングをずっとされてきて、いろんな感想を持たれていると思うんですね。

まず、安倍昭恵夫人に取材したことがありますね。それをお話いただけますか。

**ワーグナー** 2015年の2月に取材しました。ちょうどその前に、安倍総理は「女性が輝く社

会」というスローガンを打ち出して、それがかなり注目されていました。その関連で、奥さんもいろんな発言をして、例えば「家庭内野党」とか、あと原発反対に聞こえるような発言もしたので、ぜひともお会いしたいと思って、それで申し込んで、特に、居酒屋も開いたので、ぜひとも居酒屋で取材させてほしいということで、そういうことも条件なしで受け入れてくださったので、そこでお会いしました。

**司会** どういう印象を持たれました。実際話してみても。

**ワグナー** すごくいい印象でしたね。つまり、結構進歩的で、開放的な、モダンな印象でした。

それで、普通の政治家の奥さんとかなり違うイメージでしたので、いろんな、結構深い話もできました。例えば、日本の民主主義についてとか。地方で行われている高校生のプロジェクトを紹介してくれました。3・11の大地震の後に大きな防潮堤を作る国の計画があり、これに対してそれが環境、防災面で地元にとって本当にいいのか、という議論でした。学生たちが主婦たちとも議論していました。草の根民的ですよ。旦那さんがやっていることとちょっと違うんじゃないかという印象も受けました。

そこまでは、進歩的な意見を持っている方ですので、多分旦那さんもそんなに悪くないんじゃないかと思いましたので……。

**司会** 思ったけども……。

**ワグナー** ただ、いまみますと、こんどの内閣には女性が一人しか入らなかったということで、「女性が輝く社会」が結構薄まってきたという感じがします。それだけじゃないですよ、アベノミクスとか、当時に打ち出された政策もそうだと思うんですが。

**司会** 基本的には、最初、経済通信社にいらっしやっただから、経済がある意味では関心が……。

**ワグナー** そうですね、シュピーゲルに入ったときにも、私は最初は経済ニュースの仕事をしたんです。橋本龍太郎首相時代の日米の自

動車摩擦とかでしたので、結構そのほうにみんな関心を持ったのでした。

ただ、あとは完全に外交とか、いろんなことをやって、特にうちの場合は、正直言いますと、日本の政治にはあまり関心がなかったんで、日本人はどういうふうに住らしているのか、どういう悩みを抱えているのかとか、そういうことのほうにみんな興味があって。私自身も日本でいろんなところに行って、普通の人と会って、いろんな話を聞いて取材できたのは一番よかったと思います。

**司会** 経済の話に戻すと、書かれた本も基本的には経済の下降の話ですよ。日本の経済というのをバブルのピークから現在まで、「失われた何年か」という言い方をしますけれども、ここの流れをどう総括されますか。どうすればよかったというようなお考えはありますか。

**ワグナー** 日本は、実は右肩上がりの経済成長は70年代にピークに達したわけですね。その時点では、日本が直面した課題は次のステップをとって、大量生産を卒業して、もうちょっと高度なITとか、付加価値の高い生産のほうに移すべきだったと思う。

**司会** 切りかえるべきだったと。

**ワグナー** はい。それは生産とか企業のレベルだけじゃなくて、教育の面でも、高校教育とか、大学教育の側面でもやるべきだったと思うんです。これまでのシステムをずっと保ってきたわけですね。

一番わかりやすい例だと思うのは、いつもびっくりしているのは、みんな同じ時期にリクルートスーツを着て就職するということです。これはやっぱり先進国にはふさわしくないんじゃないかと、いつもそう思うんですね。社会主義的な印象を受けるんですけども。それを克服できなくて、ずっとこれも保って、人材も育てることができなかったわけですね。

つまり、いまの時代には、特にアメリカと中国と競争するために、自分独自の発想がないと生き残れないので。

特に中国とインドに行ったときにびっくりしたのは、学生たちはすごく堂々と自分たちの

意見を述べるんですね。中国は独裁国家にもかかわらず、結構みんな自分の意見をしっかりしゃべっている。目的も持っているんですけども、日本の場合は、私もいろいろ大学で講演をやったりしたんですが、結局、「わかんない」とか、選挙に行かないとか、そういう方が多いですね。

あと、外国に興味がない。外国に行かない。私が学生だった時代には、日本人の留学生がたくさんいました。でも、いまはほとんどいなくなってしまったと聞いています。

その意味でも、いろんな改革をすべきだったんじゃないかと思うんです。

**司会** いまおっしゃったのは、産業構造の転換、そういう付加価値の高い分野への移行がおくれたのと、それから学校教育も旧態依然で、若い人が育ちそこなっているというお話ですね。

その二つの部分をドイツと比較すると、どうですか。

**ワーグナー** ドイツでは、もともと教育は日本と違って、子どもを結構大人扱いするんですね。小さいときからやるんです。例えば、保育園児に対して、日本のお母さんたちは子どもと、子どもの言葉で話すんですね。ドイツの場合は、結構みんな普通の大人の言葉で論理的に話す。それがまず違う。

そして、60年代後半、あるいは70年代初めあたりには、18歳の青年たちに選挙権を与えたとか、日本は2年前の参院選で初めて適用されたと思います。その意味でもちょっと違う。

あと、高校教育の場で、有権者だという主権者教育をやるんですね。選挙がいかに大事だとか、自分が社会に貢献する義務があるという意識を育てるわけですけども、日本の場合は、むしろ政治は学校ではあまり勉強されていないんじゃないかと思うんです。それは基本的に違うと思います。

**司会** 産業構造の転換のほうは、ドイツとどう違いましたか。

**ワーグナー** 結構日本と似ています。構造的にも似たような問題を抱えています。

ただ、違うのは、ドイツは2000年あたりから構造改革、「アジェンダ2010年」という大きな改革を行って……。

**司会** シュレーダー首相時代ですね。

**ワーグナー** シュレーダー首相がそれをして、彼は、そのためには再選されなかったわけですね。だから、やっぱり痛みを伴う改革を勇気を持ってやろうとする人は再選されないんですけども。そのおかげで、メルケル首相はその政策、改革によってずっと経済はうまくいって、その業績の恩恵を受けたわけです。

彼女自身はあまり改革を行いませんでした。ただ、シュレーダー首相のおかげで、すごくうまくいきました。

**司会** そういう延長線上でみると、日本のいまのアベノミクスという政策、これは「異次元緩和」というのは非常に特徴的なんですが、これはどう評価されますか。

**ワーグナー** これは本当にバブル時代から日本がずっとやってきた処方箋です。お金をある意味でばらまいて、借金に頼って、それで問題を将来に回すという、先に送らせるというような感じですよ。つまり、痛みを伴う改革をやらない。

例えば、一番いい例だと思うのは、日本人が大嫌いな消費税のことですけども、ドイツの場合は、19%になっています。ともかくすごくどんどん高くしましたが、日本の場合は何度もそれが先送りされた。そういうことはやるべきだったと思うんですね。

**司会** ドイツ人と日本人が一番違うのは、財政に対する感覚。日本人は先送りしても全然大丈夫なんです、というか、モラル面で……。

**ワーグナー** よく原因として言われているのは、ドイツ人はハイパーインフレを体験したこと。

**司会** 経験したから。

**ワーグナー** ただ、実は日本人も戦後、ハイパーインフレを経験したわけですけども、でも、日本の場合はすぐに忘れちゃったみたいなので……。

**司会** それで、また日独比較の延長線で言うと、民主主義のあり方、政治のあり方についても違うというご指摘ですけれども、どう違いますか。

**ワーグナー** 多分、根本的な違いは、戦後あるいは戦争に負けたことは、ドイツ人はそれを解放として受けとめているんですね。50年代、60年代にはそうではなかったと思いますけれども、いまは、政治的なコンセンサスは、ドイツ人にとって、ヒトラーとかナチス政権からの解放だったということ。

ただ、日本の場合は、「降伏」という言葉も使わないで、ただ「終戦の日」とか、そういうほうに……。あと、戦争は根本的にそんなに悪くなかったんじゃないかという考えを持っている方も結構いると思うんですけども、その戦争に対する考え方が根本的に違うと思うんです。それによって、戦後に作った社会とか政治システムも違うんですね。

民主主義というのは、ドイツではプレゼントとしてももらったという感じで、それを生かさなければならぬというか、それを生かす義務もあるという考えを持っていると思うんです。それに対して日本の場合は、民主主義に対して、ある意味で、もらわなくてもよかったお土産みたいなことで、アメリカに押しつけられたと言う。とにかくあまり元気な民主主義ではない。

**司会** 元気ではない。

**ワーグナー** つまり、儀式的な……。

**司会** 形式的な？

**ワーグナー** そう、形式的で。例えば日本のニュース番組をみますと、いろんな国の審議会が何か会議をやっても、実はもう中身がすでに決まっている。最後は首相に報告書を渡すのですが、実はもう誰かが決めている。

**司会** 役人が根回しして終わっていると。国会でも出て来た法案はすでに与党の了承を取っており修正の余地がない。

**ワーグナー** そう。あれは違うと思うんですね。ドイツの場合は、いろんな委員会審議の過程で、法案を変えることもできるので、最後まで議論する。結構激しく議論するわけです。

もちろん国民性もあります。ドイツ人は議論が好きで、それは日本とちょっと違います。

**司会** あと、デモとか集会でも違いがありますか。

**ワーグナー** デモも違いますね。例えば原発ですが、私の学生時代からずっと市民による反原発デモがありました。最近では、右翼に対して市民がデモを行うこともしばしばあるのです。ドイツ人には、普通の市民が町に出て行って自分たちがこれまで作り上げて来た社会的安定は自分たちが守らなければならないという意識があります。これはちょっと日本と違うと思うんですね。

日本の場合は、何か上に従うとか、そういう発想のほうが強くないんじゃないかと思うんですが。

**司会** 先ほどちょっと出てきた、アメリカとの関係ですけれども、日独両方とも敗戦国としてアメリカとの関係を戦後また一から作り始めたんですけども、日本が、アメリカのプレゼントとしても民主主義を生かし切っているかどうかということ。

それから、どうも安全保障面でおんぶに抱っこ状態があるがゆえに、自立的な政策運営ができていない部分があるんじゃないかというようなことを、日本人ですら思っているんです。戦後の出発点は似たようなものだったと思うんですが、どこでドイツとの違いが出て来たのでしょうか。

**ワーグナー** 多分、一番大きな違いは、日本の場合は占領国はアメリカ一つでした。ドイツの場合は、四つでした。フランス、イギリス、ソ連とアメリカでしたので、その意味で、日本の場合は、アメリカ様ばかりみていた。そのような構造はドイツの場合はなかったんですね。

**司会** 占領体制ね。

**ワーグナー** 占領体制がまず違った。にもかかわらずアメリカはもちろん大きな存在でしたし、いままでそうでした。

ただ、アメリカに対する憧れは結構あったんですよ。日本にいてわかってきたと思うのは、

日本の場合、人種が違うという側面も入っています。そのことはドイツの場合は問題なかったので、結局、アメリカが結構好意的にやってくれとか、そういう感じでした。それで、みんな音楽とかアメリカのソフトパワーに憧れて、アメリカは絶対守ってくれる、そういう発想を持っていたんです。けれども、最近、トランプ政権になって、これは著しく変わってきて、メルケル首相は、我々はもう今度は自分の力でやらざるを得なくなると言い出したので、実状は認めて、アメリカもあまり信用できなくなってしまったということで、それは大きな変化だと思います。

**司会** トランプによって、そうなっている。

**ワグナー** ええ、トランプによって。

オバマ時代までは、本当に価値観の共通認識もあったんですけども。ただ、急にこんなにいろいろ敵対的に言われているので、それはドイツの政界にとって大きなショックです。

**司会** そのトランプ的な自国ファースト的な世界の趨勢と、メルケルさんのリベラルな姿勢の中で、トランプ的なものが強くなりつつあるという感じ、いまのヨーロッパの各国をみてもそんな感じがするんですけども、その辺はどんなご印象ですか。

**ワグナー** そうですね。確かにドイツもこれから一からいろいろ考え直さなければならぬと思います。

幸いEUがあるんですけども、EUもいま問題だらけですし、ただ、EUしかないのも、その意味で、EUを強くして、それでアメリカと中国と対等で外交を行うようにしなければならぬわけですね。

ただ、メルケル首相は、ご存じのように、非常に弱くなってしまったし、あと彼女はもともと自分のビジョンを打ち出すような政治家ではないです。彼女は静かで、何も説明せずにいろいろ管理しているとか、状況の危機管理とか、それは上手なんですけれども、いまヨーロッパに必要だと思うのは、前向きにビジョンを打ち出す政治家ですね。

マクロン・フランス大統領は、それを自分で

いまやっているんです。でも、ドイツなしではできないので、その意味で、ドイツの政治家はいま彼をひとりぼっちにさせているので、ちょっとかわいそうな面があるんです。

いまドイツとフランスが協力しない限り、本当にEUは危ないと思います。

**司会** メルケルさんの後というのは、どなたかいらっしゃるんですか。

**ワグナー** いま党内で、キリスト教民主同盟の中で3人が競い合っているんですけども、ただ、本当にその器のある人がどこまで出てくるのか、ちょっと不安ですね。3人の候補者の中でも、ヨーロッパの将来のためのすごいビジョンを持っている方はいないんじゃないかと思っています。

**司会** 先ほど、日本のこれからの生き方として、米中という二大国に囲まれて、これまでは、どちらかというアメリカにくっついていけばよかっただけのような気がしますが、新しい役割が求められているというお話があったんですが、その辺はどんな役割が求められているとお考えになっていますか。

**ワグナー** 日本の立場は非常に難しいと思うんですね。ですから、首相は誰が務めても非常に困ると思うんですが、超大国として台頭している中国とアメリカの板挟みになって。ただ、いまの政権がやってきたようなことでは、ちょっと日本は危ないんじゃないかと思うんです。

つまり、もっと積極的に近隣諸国との外交でいろいろやりとりしないとだめだと思うんです。特に韓国に関しては、それは言えていると思うんですね。

韓国は自分の取材範囲ですので、しょっちゅうソウルに行っているのですが、二つの国がこんなに仲が悪いのは本当にもったいないと思います。私も韓国人に向かって、同じようなことを言っているんですけども、本当にいまの日本の政界は、ただの韓国嫌いという印象を受けるんですが、本当に深い意味で、和解の努力をしない限り、日本も損しますね。

日本にとって、明治時代以前から、ずっと朝

鮮半島を無視することはできないので、そこと仲良くしないとだめですね。もちろん、日本にとって外交の範囲とか、非常に限られているんですけども、ただ、韓国の文在寅政権をみますと、そこも実は同じように大国の間に板挟みになっているんです。それでも一生懸命仲介者の役割を果たそうとしている。ある意味で、上手にトランプ政権を操って、自分たちのやりたい対北朝鮮政策をいま進めているんですね。

ですから、それは日本もちょっと模範にしてもいいんじゃないかと思うんですね。

それは一つの例だけで、中国に対しても、いろんな、例えば政治家のレベルだけじゃなくて、市民のレベルでもどんどんいろんな交流を進めるべきだと思います。例えば安倍さんが靖国神社を参拝した時期もあったし、その後はかなり交流がなかったわけですよ。だから、そういうことはもうやらないほうがいいんじゃないかと思います。

**司会** わかりました。

#### ◆ 質 疑 応 答 ◆

**司会** では、会場から質問を受け付けますので、質問してください。どうぞ。

**質問** 日本と韓国との関係について、ドイツのメディア一般がそうですが、日本が戦争、いわゆる植民地支配について反省や謝罪をしていないし、きちんとした補償もしていないので日韓関係が悪いのだという言い方をしています。2015 年年末の従軍慰安婦に関する合意やこの前の元徴用工の判決等がありましたが、そのようなことが起きて、やはり日本が悪いから日韓関係がよくなると依然としてお考えでしょうか。それが一つ。

もう一つは、さきほどの話で、日本とドイツを比較して、確かに日本の場合、少子高齢化が進んでいて、非常に難しい状況になっていることは確かですが、ドイツの場合も、1970 年代ぐらいから人口が実は減っていて、移民を入れたことによって、ようやく人口を維持しました。ただ、移民導入はいまドイツ社会を分断させて、

多分ワグナーさんが大嫌いなAfD（ドイツのための選択肢）という右の政党も議会で議席を得るようになっていっています。ある種の混乱を招いているわけですよ。

日本とドイツのどちらが本当にうまくやっているかはなかなか難しいと思いますが、ワグナーさんは、日本の没落が先かドイツの没落が先か、どちらだと思いますか。

**ワグナー** まず最初の質問ですけども、日本と韓国はどっちが悪いということより、お互いに近づかないとだめだと思います、妥協して。どっちが悪いというより、心からの過去の処理が必要だと思います。

例えば、この間の慰安婦に関する合意は、あれは結局、本当の反省より、この問題は何とか終わらせたいという気持ちが明らかにその前にあったと思います。ただ、歴史というのは終わらないものだと思います。もちろんドイツ人として、それに関して偉そうなことは言えないのですが、ただ、ドイツもたくさんの国と、ポーランドとかギリシャとかと同じような問題を抱えています。その意味で、歴史の問題は永遠に終わらないと思うんです。だからこそ、常に改めて反省の気持ちを強調するしかないと思います。あと、それを言葉だけじゃなくて、いろんな交流の面でも生かさなければならぬと思います。それしか言えないのですが。

ですから、どっちが悪いというより、仲良くするためのお互いの努力は本当に必要だと思います。

いま日本と韓国は、両方ともその努力は十分にやっていないんじゃないかと思うんです。例えば、加害者が謝ったときに、それを受けとめてくれる被害者も必要なので、その意味で、ドイツが幸運だったのは、フランスがそれを受け入れてくれて、ほかの国も受け入れてくれたことは非常に良かったと思います。でなければ、和解もうまくいかないです。

その意味では、日本と韓国と中国の場合は、非常に難しいと思うんですが、だからといって、相手にしないのは解決策じゃないと思いますので、努力を絶対続けてほしいと思います。



2番目の移民のことですけれども、確かに私も自分の故郷の町、北ドイツの小さな町で、人口は2万3,000人ですが、子どものころには外国人が一人もいなかったのです。ちょうど先週行ってきましたが、いまはもうたくさんいます。

ただ、ドイツの社会は、ある意味で移民の流入によって豊かになってきた側面もたくさんあります。例えばドイツ人がやりたくない仕事をやってくれる人もいるし、あとはうちの「シュピーゲル」という雑誌でさえ、私の同僚の中で、移民が背景にある同僚たちがたくさんいるんです。若い女性と男性の記者たちとか。彼らはまた全然違う観点でいろんな問題をみているので、それによってドイツの文化は本当によくなってきた、あるいは豊かになってきたと思います。

いまの問題がこんなに大きくなったのは、メルケル首相が2015年に、急に、一挙に100万人ぐらい多量の移民を受け入れたことがきっかけです。それは特別な状況だったわけですが、あれからまたすごく減ってきたし、ドイツはこんなにお金持ちの国ですから、この問題を解決できなければ、もう何も解決できないと思います。

確かに、いろんな面で本当に大変な状況ですけれども、ただ、その過程で、いろんな手続きとか、あと警察とか検察とかの当局も、以前は全然できなかったこと、なかった能力を育てているので、これはドイツにとって必要なことだったと思います。

つまり、言えるのは、これから移民はどこの国でも、先進国でも絶対ふえてくると思います。南半球から北半球からたくさん移民がこれからも来るので。ですから、早めにそれに備えている国のほうが状況はいいと思います。

どっちなか没落するというより、とにかく早めに備えたほうがいいと思います。でなければ、政治的な困難が起こるので。

日本の場合は、すごく対応は遅いと思います。いま急にこの問題を解決しようとしているんですけれども、でも、実はもう外国人がたくさん入ってきたのに、これはちょっと遅過ぎるん

じゃないかと私は思います。

**質問** ドイツも日本も、おっしゃったように、どちらも敗戦国ですが、ドイツのほうがはるかに対米自立という点では進んでいます。

その理由として、ある日本の評論家が、ドイツは戦略的に、例えばEUをつくり、そしてユーロもつくって、その結果、その盟主におさまることによって強い立場を得ることができたというようなことを言っていました。実はこの主張は私はおかしいとっていて、EUができたのは、かなりの程度偶然といいますか、もともと欧州石炭鉄鋼共同体というのがあって、それが欧州経済共同体になり、欧州共同体になり、欧州連合、つまりEUに発展したわけですね。

つまり、ドイツが戦略的にやったというよりは、ある程度自然の流れで偶然になってきたし、ユーロに関して言えば、ドイツにとってはむしろ全く逆だった。ドイツはマルク圏をある程度形成していて、それを拡大するつもりだったのが、東西ドイツ統合を実現するために、マルクを放棄しろと英仏から言われて、やむを得ずマルクを放棄してユーロを受け入れたというのが実は現実ですよ。

ですから、戦略的にやったわけではなくて、ある意味、幸運な偶然と、嫌なことだったけれども受け入れた結果、それが結果的にはすごくよかったわけですね。ユーロという名前だけでも、実はそれはマルクと同じようなものですよ。

ワーグナーさんもその見方でいいと思いますか。

**ワーグナー** 私もそう思います。

実は、EUだけじゃなくて、NATO（北大西洋条約機構）も、ほとんどその組織は、ドイツをコントロールするためにできたわけですよ。つまり、人口も一番多いドイツを何とかコントロールして、第三次世界大戦を起こさないようにしようとしたわけです。それがもともと。

あと通貨に関して、フランスはドイツから強いマルクを奪いたかったという感じで、それ

に反対したドイツ人も多かったです。例えばシュピーゲルの設立者のアウグシュタインさんもすごく反対したんです。ユーロに反対する社説をたくさん書きました。つまり、これはドイツを弱めるための措置だと警告したんです。でも、仕方がなかった。つまり、ドイツは統一のためにマルクを放棄せざるを得なかったということとは言えると思います。

**質問** 日本がドイツ並みに対米自立を進めるためには、どのようなことが必要でしょうか。

つまり、以前とは違って中国がこんなに大きくなっていて、おっしゃったように中米の間で問題が出てきますので、昔ほど単純な問題ではないと思います。日本は90年代の末に一度、アジア通貨危機の後に、アジア通貨基金（AMF）をつくらうとしたけれど、アメリカと中国の反対で頓挫した。あれがもし実現していれば、少なくとも通貨面、経済面ではかなりの程度自立できたんじゃないかと思いますが、いまとなつてはそれはもうまず無理ですよね。そうだとすれば、日本が対米自立を進めるためには、どのような道があるのでしょうか。

**ワグナー** いまの状況ではほとんど不可能だと思いますね。いい道がないと思うし、これは本当にやるべきかどうかということも含めて。だから、その意味では、日本とドイツの状況はもちろん違うし、日本はNATOもないし、EUもないし、後ろ楯がないんです。それでもやはり、もうちょっと堂々とアメリカ人と外交のレベルでいろいろな意見交換とかしたほうがいいんじゃないかと思います。

つまり、中身に関しても、どんどんいろんな案を出してやればいいと思います。

つまり、ゴルフのクラブを渡すだけでなく、そういうことより、中身の面で、例えばドイツが行った東ヨーロッパとの和解政策、旧ソ連とポーランドとの和解政策も、当時のブランド首相が行った政策に関して、アメリカは最初すごく反対したんです。批判的にみていたんですけれども、ただ、頑張つてドイツはそれをずっと主張してきた。アメリカもいろんな勢力が

ある。民主党も共和党もある。だから、ある意味でロビー活動とかいろいろできる。

中国もそういうふうにアメリカに対してやっている。日本もそういうことをどんどん積極的にやれば、もうちょっと行動範囲は広がるのではないかと私は思います。

ただ、基本的には、アメリカに頼らざるを得ないことは変わらないと思います。

**質問** きょうは貴重なお話をありがとうございました。

日本での取材経験が大変長いと思います。ほかのアジアの国にも駐在されて、取材して、日本の報道の自由の度合いについて、どのようにお考えか、お伺いしたいと思います。

毎年、パリに本部がある国境なき記者団が、世界180カ国の報道の自由の度合いについてランキングを出します。毎年、北欧諸国を中心に上位をヨーロッパが占めることが多いのですが、ことしドイツが15位だったと思います。イギリスが40位まで落ちて、アメリカがいまこの大統領で45位、ちょっと下がり方が少ないのではないかと私は思うのですが、さらにそこから20カ国ぐらい下に、日本が67位になっております。この判断はフェアだと思われますか。ワグナーさんのご経験を踏まえて、お聞きします。

それから、そもそもこの団体が世界180カ国で十分な調査をしているのか、予算面やスタッフの面は十分なのか。記者団という以上はファーストハンドの直接現地で調査をしたうえでの判断になっているのか、個人的には疑問がないわけではないのですが、この点も含めて、ご意見をお伺いできればと思います。

**ワグナー** その調査は、具体的にどのように行われているのかは、私も詳細までよくわかりません。ただ、私も日本の記者の友人から、しょっちゅう自分たちが書きたいことは、上司のほうからボツにされて、あるいは誰かが左遷されたりとか、どこかの田舎のほうに行かされたりとか、そういう話もあるので、その意味で、もうちょっと言論の自由を生かしてほしいと

いうことは確かです。

私の前の赴任地である中国に比べれば、日本は本当に言論の自由の天国だと思うんですが、日本の問題は、直接上からの弾圧ではなく、マスコミの自粛姿勢だと思います。誰も命令をしなくて、付度とか自粛とか、そういう形で、自分たちの第四権力としての自由を生かせていないんじゃないかと私は思います。

ですから、ランキングというより、これをどうするのかということだと思います。

私が直接に取材した問題じゃないんですけども、聞いたのは、森友学園の問題を頑張って取材したNHKの記者が、事実上左遷させられて、最終的には退社したという話を聞いています。そういう話を聞きますと、本当にどこまで一人一人の記者に自由があるのかという疑問があるんです。

あと、NHKの前の会長の発言もありましたよね。政府が右と言って、うちは左に行けないとか、そういうような発言だったと思うんですけども、とにかく、もうちょっと言論の自由を生かしてほしい。あと、いつも言われている記者クラブ制度——日本記者クラブは非常に貴重な存在だと思います。私も企画委員会に参加させていただきましたが。ただ、いろんな組織まで記者クラブが本当に必要なのか、つまり、その記者はその組織の屋根の下でずっといて、エサを与えられるような感じで、情報をくれることを待つということは、あれはやっぱりよくないんじゃないかと思っています。やっぱり外から独自の視線で取材してもいいんじゃないかと思っています。

とにかく、そのことが変わればいいんじゃないかと思っています。

**司会** ドイツには記者クラブ制度はないですか。

**ワグナー** 例えば警察とか、検察とか、どこかの企業にとか、そういう記者クラブはありません。あるのは、ドイツの連邦記者クラブです。ベルリンの大きな記者会見を行っている。でも、それはあくまでもジャーナリストたちが

主催者です。

**質問** 日本の若い人たちが元気がない、また外に対して関心がないというお話でした。

私も大学で教えていることがあって、非常にその感覚はよくわかるのですが、どうしたらいいのかということがなかなかつかめません。どうしたらいいのか、あるいはどういう刺激を与えたらいいのか、何かヒントを教えていただければと思います。

**ワグナー** もちろん、その理由は、国民性もあります。これはいい面もあるんです。この社会は非常に調和を重視しているから日本は暴動とか混乱が起こらない。それはいいことだと思うんですけども、ただ、学校のときから、あるいは幼稚園の時代から、自分独自の意見を言うこと、あるいはそれを求めること、育てることが大事だと思います。

政府がいま愛国主義の教育にも力を入れているんですけども、独自の個性に育てるための努力も必要だと思います。

例えば、自分の意見をどういうふうに述べたらいいのか、あるいは生徒たち同士を本当に議論させたりとか、それに力を入れるべきだと思います。

あと、自分が所属するグループと違う行動をとっている人をいじめるとか、あるいは排除しないで、かえってそういう人たちにご褒美を与えたらいいんじゃないかと思っています。

日本は教育政策の面で力を入れるべきだと思います。

**質問** ドイツとは違いますか。

**ワグナー** 違います。非常に小さいころから、自分の意見を先生のほうからも求められるわけです。ですから、いろいろ暗記するより、自由に議論させたりして、それによって、とにかくいろいろ自分たちにやらせるとか、生徒同士でいろいろプロジェクトを組ませたりとか、そういうことは日本より多いんじゃないかと思っています。

ですから、それを本当に思い切って政策目的

にしない限り、日本の競争力はちょっと危ないんじゃないかと思います。特にITとか、そういう分野は独自の発想でしか勝てないので。

**司会** ありがとうございます。

では、ここで終わりにしたいと思います。

ワーグナーさんがドイツ語で書いていただいたクラブへのメッセージです。

**ワーグナー** 「Kein Fortschritt ohne Meinungsfreiheit」。日本語で「言論の自由なくして進歩なし」という意味です。それはともかく、明るい意味で、日本記者クラブにも言論の自由のために頑張ってもらいたい、ということで書きました。

**司会** ありがとうございます。

**ワーグナー** ありがとうございます。(拍手)

文責・編集部